

テーラカラーの構成 第3報

— 外観に優れた上衿の構成 —

加藤 祥子
(家政学教室)

Construction of Tailored Collar No. 3 — Making the Top Collar Look Good —

Shoko KATO
(Department of Home Economics)

1. 緒言

新学習指導要領の実施に伴い、中学校技術・家庭科における「被服」領域が選択となり、高等学校家庭科は男女共修になった。この改定で被服製作技術に関する内容が大幅に縮小される恐れがある。また高校での家庭科の内容構成について、被服・衣生活に関しては製作技術への期待は薄いとされた報告もある。¹⁾被服製作に関する授業時間数の減少に対抗し得る資質の高い教員を養成したい。また縫製の基礎を一通り学んだ学生にとって、テーラカラーは縫製を経験したい憧れの一点となっているのも事実である。

テーラカラーは名称に残るように難易度が高く、素材の選定、型紙作り、裁断、縫製、仕上げのそれぞれに細かい留意点があり、初心者入門を阻んでいる。一連の実験を行うことによって、ブラウス、スカートを仕上げただけの初心者が、テーラカラーのジャケットを縫製できるよう指針を与えたいと考えた。

第1報²⁾において、テーラカラーの上衿の縫製に効果をあげる「芯の留め方」を検討した結果、従来裏衿全体に行ってきたハ刺しより、衿腰部をミシンによって直線縫いし、折山線と衿羽根部をハ刺しすることで縫製効率も上がり出来上がりの効果も期待できることが分かった。

第2報³⁾では、熟練と時間を要するハ刺しに代わり、家庭用のミシンを用いて裏衿の成形を試みた。その結果、衿腰に強度、弾力があり、自然な丸みに折れ返る裏衿が完成した。第3報となる今回は表衿を中心に衿付けの母体となる身頃との関係も検討し、外観を向上させるための小実験を行った。裏衿との寸法差をどの位置にどう付けると効果があるか、衿腰部にできるしわや折り山にできるこぶを解消するためにはどうしたら良いか、また芯の違い、芯の裁断方法は外観に現れるのか、表衿を展開した場合の外観に違いはあるか等、上衿の外観を向上させるにあたって疑問に思われる点を解決していく。連続した実験を行い順次検討する。

2. 実験方法

実験は上衿の外観を向上させる為に必要な項目を取り上げ、テーラカラーの上衿を作成、実験服に縫製

して比較検討した。

実験服は、第2報と同様に表1に示す文化式婦人参考寸法Mサイズ⁴⁾を用いた文化式原型をもとに製図した文化式テーラカラー⁵⁾の実験服である。図1は参照した文化式テーラカラーの製図であり、図2は実験服の型紙と採用した縫代である。

表1 文化式婦人服参考寸法

Mサイズ (mm)	
計測項目	寸法
胸囲	820
胴囲	620
腰囲	880
背丈	370
背肩幅	390
背幅	350
胸幅	340

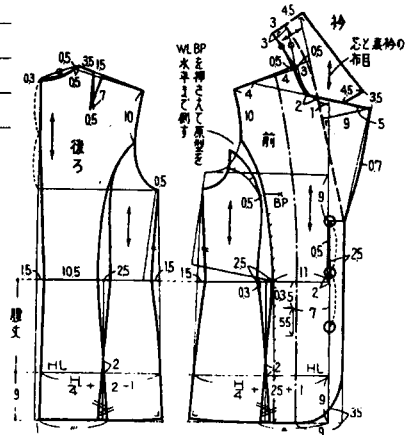


図1 文化式テーラカラーの製図

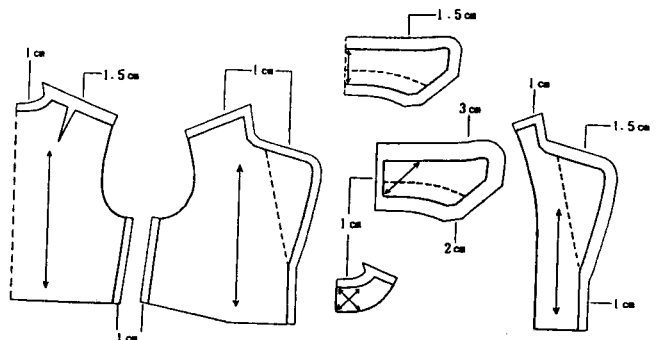


図2 実験服の型紙と縫代

実験服の形式は袖なし、一重仕立てで 図1 のように衿腰幅 3cm, 衿羽根幅 4.5cm, あきの深さは胸囲線より 9cm, 持ち出し分を 2.5cmとした。

実験1～5の実験服の素材には40番手, 生成りのシーチングを, 実験6にはカシミアフラノを使用した。素材の諸元は表2に示す。

表2 素材の諸元

項目/名称	シーチング	カシミアフラノ
組成	綿100%	毛90%ナイロン10%
組織	平織	変化斜文織
厚さ(mm)	0.33	0.78
平面重(g/cm ²)	0.154	0.270
糸密度	タテ 24.8	19.2
(本/cm)ヨコ	24.6	16.0

芯地の諸元は表3に示す。裏衿に一般芯地のワンピース「カネカロンKPA6300」を, ラベル部には編み地の接着芯地「アピコAM200」を使用した。

表3 芯地の諸元

種類	一般芯	接着芯
品名	カネカロンKPA6300	アピコAM200
組成	たて糸 レーヨン・スフ混紡 よこ糸 レーヨン・スフ混紡	ポリエステル100% アクリル100%
組織	平織	平織
厚さ(mm)	0.21	0.19
平面重(g/cm ²)	0.008	0.006
糸密度	タテ 24.4本/cm	20.0段/cm
ヨコ	17.6本/cm	11.0目/cm

シーチングで行った実験1～5のラベル部の折り返しによる形態のずれは, 身頃と見返しのラベル部分を重ねて折り返し線を一致させて, 出来上がり通りに折り生じたずれを実測して寸法差とし, 5枚実測して得た平均値を寸法差の定数として, 図3に示すように衿付け止まりから返り止まりの間に入れた。

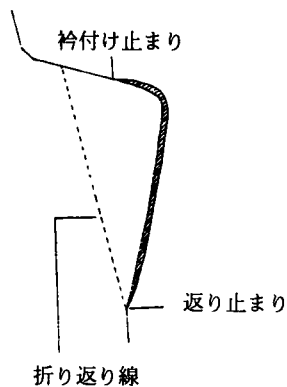


図3 ラベル部分の寸法差

実験服は表4の人台に装着し, 前面より「衿羽根先の反り返り」, 「ラベル先の浮き」を測定, 後面では表5の分類で「衿腰のしわ」の数を, 更に「折山のこぶ」の数を測定して総合的に外観を判定した。

表4 人台の計測値

計測項目	寸法 (mm)
胸囲	800
胴囲	580
腰囲	875
背丈	375
背幅	320
胸幅	350

表5 衿腰のしわ

分類	大きさ (cm)
特大	3.1以上
大	2.1~3.1
中	1.1~2.0
小	1.0以下

上衿は表衿と裏衿の2枚で構成されており, それが折れ返って更に首を包む立体構造になっている。そのため表衿と裏衿を同形の型紙通りに縫製すると, 衿羽根先が反り返り, 首回りに接する表衿の衿腰部で布が余り, 皺が生じ, 折れ山にこぶを形成して外観の悪いものとなる。これらの問題を解決するため以下の6実験を行った。

1) 実験1 表衿に入れる裏衿との寸法差が外観に及ぼす影響

重なった表裏2枚の衿は同時に折り返ることによって, ずれによる形態の差が生じるため表衿が裏衿よりも大きくなければならず, ずれによって生じる寸法差を裁断の際に入れておく必要がある。その位置と分量を求め外観への影響を検討する。

実験服は寸法差を図4に示す3カ所a～dの衿外回り, b～b', a～dの衿付け側のそれぞれに2mmと5mmを入れた6着と寸法差をまったく入れない表裏同型の上衿を付けた1着を加え7着とした。(表6)

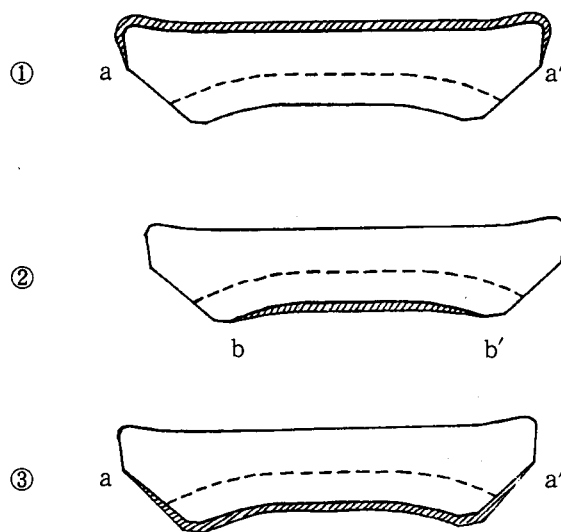


図4 寸法差の入れ方

表6 表衿に入れる寸法差

項目 実験服	寸法差	
	位置	分量(mm)
1	a~d 衿外回り	5
2	a~d 衿外回り	2
3	b~b	5
4	b~b	2
5	a~d 衿付け側	5
6	a~d 衿付け側	2
7		0

2) 結果 1

表衿に入れる裏衿との寸法差に適した位置と分量について7着の実験服で比較検討した。結果は表7のようになった。

表7 表衿に入れる裏衿との寸法差が外観に及ぼす影響

測定項目 単位	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
実験服	左	右	左	右	特大	大	中	小	
1					1			4	2
2					1	1			3
3					1	1		1	
4							1	1	
5					1	1		2	3
6					1			3	2
7	6	7	3	3			2	2	2

寸法差を入れない実験服7には衿羽根先の反り返りとラベル先の浮きがみられたが、寸法差をいずれかに入れた実験服1~6にはみられなかった。特に実験服4は衿腰のしわが小さく目立たず、数が少なく、折り山のこぶも観察されなかった。身頃と接合する衿付け側の短い範囲であるb~bに2mmの寸法差を入れたものである。これは今回用いたシーティングに適した寸法差であり、布や芯の厚みにあわせた寸法差の入れ方については更に検討を要する。

3) 実験 2 衿ぐり線の延長

実験1の結果より、表衿にわずかな寸法差を入れることで衿羽根先の反り返りやラベル先の浮き、折れ山のこぶが無くなり、衿腰のしわも小さくなって数も減少することが分かった。実験2では、実験1で良い結果を得た表衿の寸法差をb~bに2mm入れて上衿を作成、衿付けの母体である身頃の衿ぐり線を延長して、衿腰部を延ばして付けることでしわやこぶの原因となっている衿腰部の余分な布を分散させることを試みた。

実験は衿ぐり線を延長しないもの、端で5mmずつ衿ぐり全長で10mm延長するもの、端で8mm全長で16mm延長するものの3着の実験服で行った。延長するものは、後ろ衿ぐり線をそれぞれ延ばし図5のように肩線を引き直して縫製した。

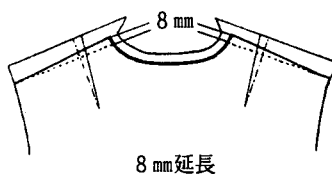
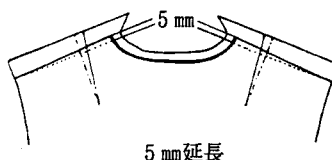


図5 後ろ衿ぐり線の延長

4) 結果 2

結果は表8のようになり、身頃の衿ぐり線を5mmずつ、衿ぐり線全長で10mm延長した結果が良いことがわかった。しかし無操作の結果にも大きな違いは現れず、次の実験3で再検討することにした。

表8 衿ぐり線の延長

測定項目 単位	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
実験服	左	右	左	右	特大	大	中	小	
1							1	1	1
2								2	
3					2		1	1	3

5) 実験 3 表衿の衿腰部を小さくして外観を向上させる

上衿の衿腰部、折り山に生じる皺やこぶの原因となっている表衿の余分な布をカットすることにより、直接的に減少させて外観への影響を見た。まだ解決していない実験2の後ろ衿ぐり線延長の効果を見るため、これを組み合わせて表衿の操作も試みる。表衿は図6のように型紙通りのもの、衿付け側の中心を3mm斜めにたたむもの、5mmたたむものの3種、後ろ衿ぐり線は、操作しないものと端で5mm、全長で10mm延長させるものの2種を取り上げ、組み合わせて表9に示す6着の実験服を作成した。

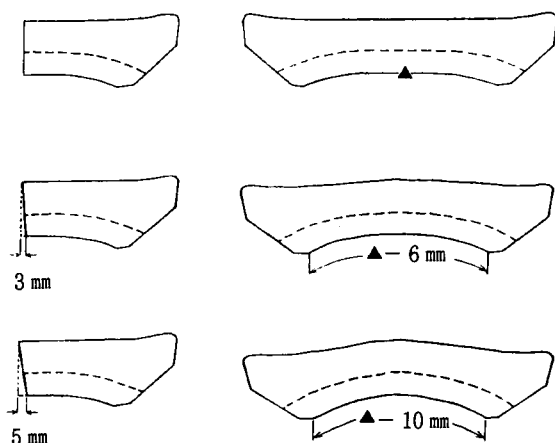


図6 表衿の型紙の操作

表9 実験服

実験服/項目	後ろ衿ぐり線	表衿
1	型紙通り	型紙通り
2	型紙通り	3mmたたむ
3	型紙通り	5mmたたむ
4	5mm延長	型紙通り
5	5mm延長	3mmたたむ
6	5mm延長	5mmたたむ

6) 結果 3

結果は表10のようになった。

表10 表衿の衿腰部分を小さくして外観を向上させる

測定項目	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
単位	左	右	左	右	特大	大	中	小	
実験服									
1									2
2									2
3									4
4							1	1	2
5							1		
6							1		1

衿羽根先の反り返りとラベルの浮きはどの組み合わせにも見られなかった。実験服1, 2, 5の3着には折れ山のこぶが見られず、中でも後ろ衿ぐり線を5mm延長し表衿の型紙を中心で3mmたたんだ実験服5は最も皺が少なく外観に優れていた。一方実験服6は皺やこぶは殆ど見られないものの、縮め過ぎた衿付け線のため後ろ身頃の衿ぐり周辺にしわがより外観が悪化した。

以下の実験には実験服5の組み合わせを用いる。

7) 実験 4 芯の種類による影響

従来裏衿には扱いにくい毛芯を留め付けてきたが、第2報によってミシンでジグザグ縫いを施すことも有効であることがわかった。この方法を初心者が活用できるには、扱いにくい毛芯に代わって広く普及している接着芯を使いたい。前述の表3に示す2種類の芯を用いて裏衿を作成、2着の実験服とした。

8) 結果 4

結果は表11のようになった。

表11 裏衿に用いる芯が外観に及ぼす影響

測定項目	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
単位	左	右	左	右	特大	大	中	小	
実験服									
1									2
2							1		

2種類の実験服間に外観の差は認められなかった。よって以下の実験では接着芯を使用することにした。しかし接着芯の種類は多種多様であり、接着芯の種類による仕上がりの差異を検討する必要がある。(次報で検討)

9) 実験 5 芯の裁ち方

従来、裏衿と共に別裁ちしていた裏衿の芯を輪裁ちにすることで作業の簡略化を図りたいが、従来通り別裁ちにした芯、輪裁ちにした芯を使って2着の実験服を作成、両者の外観の比較を行った。芯については、実験4の結果を受けて裏衿、見返し共に編み地の接着芯アピコAM200を使用した。

10) 結果 5

結果は表12のようになった

表12 芯の裁断方法

測定項目	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
単位	左	右	左	右	特大	大	中	小	
実験服									
1							1		
2							1	1	1

衿羽根先の反り返りとラベル先の浮きは両者共に見られず、外観上の差も認められなかった。折れ山のこぶ、衿腰の皺は輪裁ちしたものの方が別裁ちしたものより多く見られたが、外観を大きく損なうものではなかった。従って、以下の実験では輪裁ちを用いる。

11) 実験 6 表衿外回り線の延長 (厚手素材の場合)

シーチングを用いた実験1~5の結果をもとに厚手素材による検討を試みた。実験結果より予測される寸法差の増大を加味し、予備的実験を行ったが、衿羽根

先が反り返り、身頃からラベル先が浮き、シーチングの実験結果から引き出された値に数値を追加することでは、外観の向上はなし得なかった。これら外観を低下させる原因となったのは、素材の厚みのために足りなくなった表衿の外回り寸法であり、その寸法を確保するために工業用パターンの調整法⁶⁾に基づき表衿の型紙を数箇所切り開き、展開することにした。実験服の素材はカシミアフラノ、諸元はシーチングと共に表2に示した。

実験は、シーチングの実験結果から予測した数値を基に作成した実験服と表衿の型紙を展開することによって外回り線の長さを確保した実験服の2着で行った。またラベルの折り返しでもシーチングよりずれが大きくなることより、実測値を用いる。なお、シーチングでは僅かな値であったことから衿付け止まりからいれても外観に殆ど影響がみられなかったが、寸法差の多い厚手素材になると、衿付け止まりから入れると型紙上では直線である上衿とラベルの切り替え線とラベルの外回り線が図7-①に示すように歪む。この歪みを解消するために寸法差を折り返り線との交点から返り止まりの間に入れた。(図7-②)

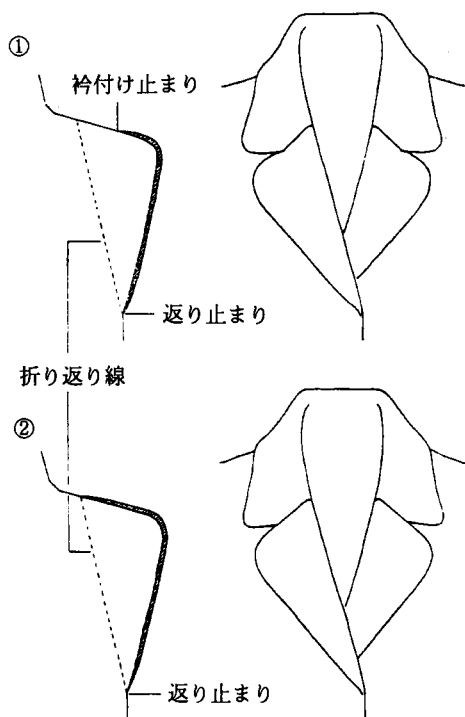


図7 寸法差を入れる場所による外観の違い

- 表衿は図8に示す①～④の手順に従って展開する。
- ①表衿の型紙の衿付け線において、ネックポイント(N.P.)と後ろ中心間を3等分した1つ分の長さをN.P.の両側に取り、その2点から折れ山線に直交する展開線を入れる。
 - ②各展開線で切り、折れ山線との交点を基点に外回り線上で2.5mmずつ開きその反動を衿付け線上で重ねる。

- ③折れ山線に平行に表衿と裏衿の寸法差を5mm開く。カシミアフラノはシーチングの約2.5倍の厚さである。寸法差をシーチングの2.5倍の5mmとした。
- ④外回りの控え分として2mm加える。

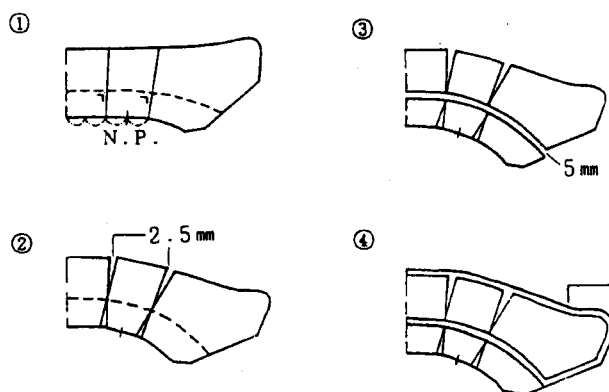


図8 表衿の型紙の展開法

12) 結果 6

結果は表13のようになった

表13 表衿外回り線延長

測定項目	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
単位									
実験服	左	右	左	右	特大	大	中	小	
1	25	25	20	15				1	
2	10	6	11	6		1	2		1

表衿の型紙を切り開いて外回り線の長さを延長することは、衿羽根先の反り返りやラベル先の浮きの解消に有効であることが分かった。一方、展開した方に皺やこぶが多く生じてしまったのは予測した寸法差が不適當だったためと思われる。布の種類によって適当な寸法差を予測することは非常に困難である。寸法差の入れ方については更に検討を要する。

3. 要約

小・中・高等学校の家庭科教員を目指す教育大学の学生に、高い縫製技術を習得させることは、今後の被服製作に関する授業時間数の減少に対抗し得る資質の高い教員を養成することになるとと思われる。また入学して縫製の基礎を一通り学んだ学生にとって、テーラーカラーは憧れの1点でもある。難易度が高いと言われ

るテーラーカラーに初心者でも取り組めるよう縫製法を確立したい。今回は表衿を中心に身頃との関係も検討し外観を向上させるための小実験を行った。

テーラーカラーの衿腰の皺、折れ山のこぶは、上衿が首回りを包む立体的な構造となっていることから、内側になる表衿の衿腰部で布が余る事に起因する。後ろ身頃の衿ぐり線を延長して上衿の衿腰部を延ばして付けることと、表衿の型紙をたたんで表衿腰部の布を直接的に減らすことを組み合わせて行い解消することができた。布の厚みに伴い顕著に現れた衿羽根先の反り返り、ラベル先の浮きは表衿の型紙を展開することによって外回り線を延長し改善することができた。しかし、表衿に入れる寸法差は素材や裏衿に用いる芯がいかなる厚みであっても対応できる方法を検討する必要がある。また裏衿に用いる接着芯についても種類による仕上がりの差異を確かめ、テーラーカラーに適した接着芯について検討していきたい。

本研究に御協力くださいました皆様に深謝致します。

引用文献

- 1) 日本家庭科教育学会, 小・中・高等学校家庭科の新構想研究 — 資料編 —, 1996年, 4
- 2) 加藤祥子, テーラーカラーの構成第1報, 愛知教育大学家政学教室研究紀要, 25, 1994年, 77~84
- 3) 加藤祥子, テーラーカラーの構成第2報, 愛知教育大学家政学教室研究紀要, 44, 1995年, 61~66
- 4) 文化服装学院・文化女子大学編, 文化服装講座1 婦人服編 (I), 文化出版局, 1981年, 54
- 5) 文化服装学院・文化女子大学編, 文化服装講座2 婦人服編 (II), 文化出版局, 1981年, 28
- 6) 工業用パターンガイドブック, (株)アミコファッションズ, 1993年, 77